



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	学生生徒の宗教性の成長に対する実証的研究
Author(s)	中村, 陽三; Nakamura, Y
Citation	基督教学, 9, 25-27
Issue Date	1974-06-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46303
Type	journal article
File Information	9_25-27.pdf



篇》についても前キリスト教的なものと考える。荒井氏は、フォーステールの一四の由来に関して、イラン的よりギリシア的、ミトラ教的よりイシス宗教に近いとしているが(二九一―一九二頁)、筆者には納得しかねる。更に、その「第一三の王国」を「アレクサンドリア系のユダヤ教ないしはキリスト教」と推定しながら、特に「キリスト教」と考えるのだが(一九三―一九四頁)、根拠を欠いていると思われる。推定するならば、むしろ「ユダヤ教」ではなかるうか。なぜならば、マクラーが見抜いたように、この文書には「ユダヤ教の創造神と一二部族へのうすくヴェールでおおわれた敵意」が存しており、第一四のグノーシス主義者の「王無き世代」が「第一三の王国」を超越する最高の位置にひきあげられているからである。いずれにしても現段階においては、ヘアダムの黙示録に特にそのフォーステールの宗教史的位置に関して、確實なことはほとんど言いえてはいない。カセは、この文書が最終的に成立するまでに至るかなり複雑な前史を想定しているが、今後、そのような成立史の研究が宗教史的位置確定のために必要となるであらう。

学生生徒の宗教性の成長に 対する実証的研究

中村 陽 三

(1)はじめに 学会発表の折には調査票、学年別百分比表を報告資料としてあったが与えられた字数ではその再録が不可能なので調査報告の概要を記すにとどめる。

(2)調査研究の目的 中学高校という青年前期から中期にむかう発達のプロセスに於て宗教的人格がいかにして形成されうるかを教育プログラムとの相関の中でみる為にキリスト教主義学校の六年一貫教育の場にその実証の場を求めて今回の研究では宗教意識の側面でその発達のプロセスを調査しようとしたものである。

(3)調査対象 北星学園女子中学高校の女子生徒の中学一年から高校二年までの六組である。つまり中学一年四六人、中学二年四七人、中学三年四九人、高校一年四七人、高校二年普通科五〇人、英語科五八人の合計二九七

人である。

(4) 調査票 最近、青山学院大学の長谷川浩一氏がIB Cよりの委託研究として日本基督教教育研究所の調査研究として実施した宗教意識調査の方法を援用して作成した。つまり宗教意識を俗信的迷信的意識、一般的宗教意識、基督教的意識の三つの視角によって調査する方法であり、夫々二〇項目の調査項目を準備し、五段階評定法によってチェックさせる方法をとった。(調査票については字数の関係上省略)

(5) 調査方法 集計については学年毎に単純集計を行い、百分比を算出し、肯定群、中間群、否定群として資料化し、学年がすすむに従って百分比がどのように変化しているかを見ることによって宗教意識の構造が成長と共に変化していくメカニズムをとらえようとした。

(6) 調査分析 (イ) 俗信的迷信的意識 ① 中学二年でこの意識はやや稀薄になるもの高校になるに従い、なお根強く残り、特に俗信的意識は強いとみられること。② 迷信的意識は俗信的意識に比べてやや否定的であること。③ 反面、手相、姓名判断、おみくじなどへの信頼度は非常に強い。このことは青年期にみられる精神的不安定状況をよく反映しているといえる。④ 基督教主義学校に学

んでいて、宗教について、基督教を何か独自の宗教として受けとめていない、つまり、どんな宗教でも結局同じものをめざしていると考えている人が多い。特に高校になると増加する。

(ロ) 一般的宗教意識 ① 学年に共通していえることは積極的に神を求め、又支配されていると思う意識は少ないが、消極的に心情的に神というよりか、自我を超えた存在、ジョンソンのいう内的自我を統一するものとして何かの存在を肯定する者が多い。これは疾風怒濤の時代といわれる青年期の発達段階にあって内的自我を安定化し、統一するという自然的欲求の影響とみられる。② 死後の世界を肯定的に考えている者が多い。③ 中学三年に意識のピークがあり、高校一年でうすれ高校二年で再び上昇している傾向がよみとれる。これは注目すべき一つの特徴といえることであり、つまり青年前期に宗教的なものを一応受容する態度が形成されるものそれは中期の自我確立の段階で再び問い直される。つまり、教育プログラムとの相関でいうと、子供達は中学と高校とで二度の宗教的チャレンジを受けていると考えられる。④ 高校二年では普通科に比べ、英語科の生徒の方が鋭角的に反応している。これは英語科では宗教に対して普通科よ

り新鮮な印象があり興味関心の度が強く、適応度が高いことを示している。(これは英語科が殆んど公立中学出身者でしめられ高校ではじめてキリスト教に接する者が多いことに関連している)

(ハ) 基督教的意識 ① 全般に受容度は低い。(否定群又は中間群が多いことにより知りうる) ② 罪意識は肯定的にとらえられており、しかも学年が進むにつれて上昇している。これは、青年中期に宗教意識がある程度の適応を示すことと相関している。

(7) 結論 ① 青年前期及び中期の発達段階における心理的特徴といわれる自己否定、外部否定から自己肯定、外部否定にいたる精神的不安定期の心理構造がよく表出されており、鋭角的な反応よりも振幅の大きい反応がみられ、宗教意識の側面でも、中学高校という成長の発達過程では明確な有意差があまりみられないこと、わずかに高校段階で、教育学的な意味における適応度が高いといえるのではないかということ。

② 一般的宗教意識は内的自我の自然的欲求のプロセスとしてその安定の要素として肯定的に受けとめられており、このことは俗信的意識と明確に識別されることなく、相矛盾したものの同時存在という非合理的な側面をもち

つつ、一つは異教社会の風土の中で、日本人の伝統的な生活慣習の中で、一つは内発的な自然的欲求の結果と融合して子供達の中に《何か宗教的なもの》を意識下の世界に感じさせている点を指摘できる。長谷川浩一氏の論文はこの三つのカテゴリー化された宗教意識が中学高校段階では明確に意識されないという分析が因子分析の結果としても指摘されているが、本研究の分析とも符合しているように考えられる。

参考文献

- (1) 長谷川浩一.. 基督教主義学校学生・生徒実態調査(内外協力会刊行.. 基督教学校教育調査研究報告書 1971 p.115-133)
- (2) 長谷川浩一.. 宗教意識の研究(その一)(日本社会心理学会第十一回大会研究発表資料 1970)
- (3) 安倍北夫、古銭良一郎、星野 命、長谷川浩一.. 基督教主義学校生徒の宗教意識と宗教行為(その一、二)(日本教育心理学会第九回総会発表論文集 1967 p.208-211)